

人間、膝の高さから世の中を見渡すなんてことは、そうあるもんじゃない。だから諸君に教えておこう。

タフガイを気取る私立探偵がチャイナドレスの美女を甘くみると、そういうことになるのだ。

俺の目の前には、シームストッキングに包まれた、格好のいい二本のおみ足がある。目の奥には、無数の瞬く星と今夜ひと晩、そのおみ足を忘れさせない素敵な頭痛だ。

おみ足はポーズをとったモデルのように半ば開き加減になっている。いつもなら、開いた理由とその蝶番の部分に気がいく俺だが、その時ばかりはちがった。俺の興味の対象は、まず俺の顔にあった。

そつと右手を顫顫にあててみる。手刀をくらった形で、顔が「く」の字に曲がっていないか心配だったのだ。

その次に、俺は尻もちをついたまま、正面の彼女を見上げた。長い髪が夜の海を背景に、風で小気味よく踊っている。そいつを砂浜の上に広げてみたい、という欲望は、残念ながらおきなかった。

女の子を相手に本気で立ち回れるほどの、俺はフェミニストじゃない。

たった今俺をした、その愛しい右手で髪をかきあげると、彼女は訊ねた。

「どう？ 手をひく気になって？」

物事は順序だてて話さなきゃいかんと、昔、給食費を猫ばばした俺が、泣き真似だけで誤魔化そうとしたときにお袋が申しておったが、そうしようか。

元はしがらないビーチボーイの俺が、私立探偵事務所を開いたのは、今から二年前だ。何せ子供のときから悪戯好きで、図体がでかくなり腕っぶしが強くなってもその癖は直らず、ひどくまわりを困らせた俺が、土地カンと顔の広さを頼りに、始められる商売はこんなものしかなかったのだ。学校も途中で放り出されている以上、法の向こう側で「や」のつく業界に入ったとしても出世は望めない。何せ最近では、傷害の前科よりも、法学士の免状が物をいう世界だ。

港の見える丘のビルに事務所を借りると、とりあえず昔世話になった警察の皆様挨拶にいったものさ。これこれこうで、こんな商売を始めました、ってね。やっぱり向こう様は、あんまりいい顔しなかった。法の反対側じゃないにしても、いいとこ線土だからな。それでも、以前少年課にいて、今は四課にいる旦那はいつてくれたよ。

「しつかり、やんな」

おまけに驚いたね。花輪まで贈ってくれた。ところが、花輪はもう一本あってね。これが、俺の住むシ、ティ、泣く子も黙る暴力団「鬼神組」から送られてきた奴だ。花屋が気をきかせて二本並べて立てたものだから――

「祝 木須探偵事務所賛江 鬼神組」
 のと、

「祝 御開設 木須探偵事務所殿 県警捜査四課一同」
 ときたね。隣のオフィスの人なんか、こりやてつきり更生したヤクザじゃなからうかてんで、しばらくは俺が出ていくとみんな逃げ腰でさ、誤解をとくの苦労したよ、本当。別に鬼神組とは、俺がその構成員だったというのじゃなく、組長の息子があらぬ容疑をかけられた時に助けてやったことがあるんだ。

なに、酔って不良外人を刺したとか何とかいうんだが、この息子、そぞろ歩きは硬派でも、心はてんで軟派の血が通っているっていうまるで不肖の出来なのさ。そのところを、こっちはじつくり警察に説明してやったままでのことだ。だけどそれ以来、組長は何かと俺に借りを返したがっているというわけ。

ところで――

俺がこうしてのびている理由を話さなきゃならないな。彼女に悪い出来心をおこした報いというのじゃないぜ。

嫌がる相手にむりやり迫れるほど、俺はフェミニストじゃないわけでもないのさ。
 きのことだ。

えらく天気がよくて、俺は事務所の窓から見える初夏の海に見とれていた。夏の間は、どんなにグラマーな女の子より、熱く俺を抱いてくれるからな。ところが、セーリングの白昼夢をやぶって、四人の女の子が俺を訪ねてきた。

四人とも典型的いま風サーファーギャルでね。髪は真っ赤っ赤、着てる物は似たりよつたり、話し方はかつたるくて、女子大生というものの、こいつら四人合わせて知能指数¹⁰⁰じやねえかと思つたぐらいだ。

それでも俺は話を聞いてみることにした。別に仕事が少なくて焦っていたわけじゃない。相手が女の子だからさ。俺がいくら美食家^{グルメ}だつて、たまにはカップヌードルを食いたくなることもあるかもしれないじゃないか。その時のための布石さ。

わかるだろう？ この意味。

「男のひとを捜してほしいんです」

俺のデスクの向かい、弁護士をやつてる兄貴の事務所のおさ^ががりの長椅子にかけて、女の子のひとり、メガと名乗った娘がいった。

年の離れた兄貴から頂いたものは他にもある。たとえばその時、俺がほじくっていたパイプがそうだ。

「それで？」

フィリップ・マールロウもパイプを吹かすのはあまり上手じゃなかった。ひよつとしたら、パイプぐらいはサンタ・ローザ出身のナイスガイに勝てるかもしれないからな。

「私たち、F女学院大の二年生なんですけど……」

右隣にすわっている、顔じゃちよいと劣るが、胸の最標高を誇る、カズエという娘がいい足した。

「よく知ってる、君らの十級上じゃ俺の名は大変有名さ。『キスミー・ベイビー』の木須志

郎ってね」

女の子たちは嬉しそうにキヤツキヤツと笑った、この年の娘つ子を喜ばすのは、俺みたいなオジンには赤ん坊の手をひねるより簡単だ。何だか俺は悪いことをしたような気分になった。

「いなくなったのは私たちの『今月のアイドル』なんです」

「何だい、それは？」

「嫌だー。お兄さん知らないんですかー」

どうやら頭というのが、髪の毛をのばす以外、何の役にも立っていないさそうなケイという左端の子が叫んだ。君はボツだ、俺は心の中で呟いた。

「流行ってるんです。グループで、あちこちから可愛い男の子を見つけてきては『今月のアイドル』にして、皆んなで競争するのが」

メグがちよっぴり恥ずかしそうにいった。

「それで私たちが『今月のアイドル』に決めた哲クンという男の子なんですけど、その人がいなくなっちゃったんです。勤め先のバーガースタンドもやめちゃったみたいだし、マンションにもいないんです」

「いつ頃から？」

「一週間前です。もうすぐ『今月のアイドル』を見せっこする月イチのパーティーがあるんです。出てくれるって約束したのに」

「嫌になったんじゃないかな」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。